

人権教育に関する特色ある実践事例

基準の観点

価値的・態度的側面のみならず、知識的側面や技能的側面に関する指導がバランスよく行われ、実践力・行動力の育成につながっている事例

1. 基本情報

○都道府県名及び市町村名

大分県大分市

○学校名

大分県立大分商業高等学校

○学校のURL

<http://kou.oita-ed.jp/oitasyougyou/>

2. 学校紹介

○学級数

【通常の学級】1、2学年各7学級、3学年8学級 【特別支援学級】なし
【合計】22学級

○児童生徒数

【全生徒数】860人（平成24年5月1日現在）
（内訳：1年生280人、2年生275人、3年生305人）

○学校の教育目標、人権教育に関する目標など

【学校教育目標】

豊かな人間性と専門的知識を身につけ、地域社会に貢献し、21世紀をたくましく生き抜く実践力を有する人間を育成する。

【人権教育目標】

人権尊重の精神にのっとり、人間尊重の意識と態度を養い、差別のない社会の実現を目指す意欲と実践力を持った人間を育成する。

○人権教育にかかる取組の全体概要

<生徒の実態及び課題>

○「なんとなく」「なんかー」「みたいなー」等で物ごとを捉える傾向があり、授業中、教師からの発問に対して自分の考えを主張できない。

○コミュニケーション力が乏しいために人間関係が構築できないことに悩んでいる。

<取組の概要>

○生徒、教職員へのアンケート結果から生徒の実態と課題を把握。

○ホームルーム活動におけるアサーティブな表現を通じたコミュニケーション技能の習得。

<期待される効果>

○各教科やホームルーム活動等においてアサーションスキルを高めることで、自分も相手も大切にしながら積極的に自己表現できる力が育成される。

○自他の思いを理解し、相互を尊重しながら対処できる力を身につけることで、自己肯定感が高まり、その結果、生きる力が育成される。

3. 特色ある実践事例の内容

<取組のねらい、目的>

○「仲間づくり」を中心に据え、コミュニケーション能力を高め自他を大切にする心を養う。

<取組を始めたきっかけ>

○平成22年度・23年度に「大分県人権教育の進め方研究指定事業」を受けて研究に取り組む。

<取組の内容>

1. 生徒へのアンケート結果から次の課題を確認

- (1) 自分のことを好きと思えない（自己肯定感をもてない）生徒が60%以上いる。
- (2) 誇りをもてない主な理由として「成績」を挙げていることから、各教科等の授業内容を生徒に理解させる方法を検討する必要がある。
- (3) 他とうまく関われない、他を気にしすぎるあまり自分のことを大切にできない。

2. ホームルーム活動における実践

- (1) ロールプレイを体験することで、3つの自己表現の特徴を理解する。
 - ・攻撃的な自己主張
 - ・消極的な自己主張
 - ・お互いを大切にした自己主張
 - ・アサーションチェックシートを利用して自己分析する。
- (2) 他人の依頼を断るという自己表現を、ロールプレイを通して自ら考え表現することにより、相手を思いやりながらも自分のことを素直に表現する大切さを知る。
 - ・相手を大切にしながらも、素直に自分の気持ちを伝える。
 - ・意見が違っても、双方が納得のいく結論を探そうと歩み寄る。
 - ・「断る」ことは相手を拒否することではない。

3. ヒューライツ・パワーアップシートの取組

- (1) 取組に至った経緯と意義
 - ・人権教育は、全教職員で協働的、日常的に取り組むところにその意義があり、その手段として「ヒューライツ・パワーアップシート」（自己評価表）を試行。
- (2) 実施方法及び内容
 - ①次の10項目について教師が自分の授業を自己評価する。

- 全員の名前を覚え、名前できちんと呼ぶ
- 叱責するだけでなく、褒めることも忘れない
- 返答できない生徒への対応として、何らかの答えが出るまで待つ
- 生徒の能力を否定するような発言をしない
- 授業中、しゃべっている生徒は必ず注意する
- 机間巡視を行い、参加するように促す
- 参加できるような授業の展開をする
- グループ分けの時、人間関係や能力等を考えて分ける
- 丁寧な字で、読みやすい板書を心掛ける
- 授業に遅れて行かないなど、授業が大切だという態度で臨む

- ②毎月第4週を「ヒューライツウィーク」として設定、毎日授業で取り組む。
- ③週末全員分回収・保管し、人権教育部が集約を行う。
- ④集約結果を資料化して、全員に配布し情報提供する。（翌週中に配布。速報性を大切に）
- ⑤実施した翌週に学年毎にカード操作による発想法を用いて気づいたことを出し合い、成果と

課題について分析を行う。（学年部単位で）

(3) 取組の結果出てきた感想等 ※特徴的な傾向を抜粋

- ・「机間指導を行い、参加するように促す」において「あまり意識しなかった」が日ごとに減少傾向にある。
- ・「丁寧な字で、読みやすい板書を心掛ける」においてあまり意識しなかったが増加している。
- ・生徒を名前で呼ぶことで生徒との距離を縮める。
- ・「積極的に発言する子が増えた」「お互いに助け合うという協調性がついてきた」
- 「意識するだけで取組に差が出るのがよく分かりました」等の感想がある。
- ・机間指導を行う意識が低いことを感じる。
- ・問題を解かせる時に、時間を計ることにより、生徒の集中力を高める。
- ・グループ学習を取り入れ、通常の授業と形態を変える。
- ・チャイムの前に着席させ、授業の準備をさせる。
- ・授業をチャイムと同時に開始できないこともあり申し訳ない。

(4) カード操作による発想法による分析

- ・横軸に「生徒」(左)と「教師」(右)、縦軸に「成果」(上)と「課題」(下)をとったマトリックス図を利用。

(5) 成果と課題

- ・成果 <生徒の学ぶ意欲を高める3箇条>に気がついた。
 - ①授業開始前に教室に行き、生徒との会話などを通して、人間関係を作る。
 - ②生徒の発言を肯定的に捉え、褒める。
 - ③生徒の名前を覚えておくことで一人ひとりを認め向かい合う。
- ・課題 <教員の指導力を高める3箇条>に気がついた。
 - ①生徒が興味・関心を示すような教材を準備し、プリントや掲示物を利用する。
 - ②授業の導入で本時の目的や目標を明示する。
 - ③それぞれの生徒の個に応じた適切な対応・支援を心掛ける。

<取組の主体や実施体制>

- ・ホームルーム活動でアサーションスキルを高める活動は第1学年で実施し、ヒューライツ・パワーアップシートは全学年で全職員が全授業で活用した。

<講じた工夫>

- ・生徒は「アサーションチェックシート」を使い、自分の自己表現のあり方を振り返り、望ましい自己表現方法について考えた。
- ・教師は「ヒューライツ・パワーアップシート」を使い、自分の授業を振り返った。授業においても人権を配慮した指導を意識することが、個々の授

業力向上に繋がることを全員で共有することができた。

4. 実践事例の実績、実施による効果

<取組が効果を上げた事例>

- 生徒がロールプレイ（アサーショントレーニング）通じて、「相手のことを思いやる大切さ」「自分の気持ちを伝える大切さ」に気づくことができた。
- 教職員が「ヒューライツ・パワーアップシート」を使用することで「人権教育の成立基盤としての教育・学習環境」が整えられ、教職員と生徒の信頼関係が深まった。

<得られた知見>

- ロールプレイによるアサーショントレーニングが、生徒と教職員の知的理解と人権感覚を高め、「相手のことを思いやる大切さ」「自分の気持ちを伝える大切さ」を認めることができ、それを行動化できるようになるという人権教育の目標を達成させること。
- 自己表現する楽しさと大切さを味合わせることで、自分も相手も大切にしたい自己表現方法を身につけることができ、それを具体的場面で実践する過程において、自己肯定感も高まっていく。

5. 実践事例についての評価

<取組について評価及びその理由>

- この活動を通して、生徒は自己の表現方法に気づき、友人とのコミュニケーションの課題に言及し、言葉遣いについて改善しようと思うようになった。
 - ・あまり考えずに言いたいことを相手に伝えていたが、常に相手のことを考えて発言しようとする意識の変容が見られる。
- 自己表現には3通りあることを知り、消極的な表現を否定的に捉えている。
 - ・相手のことも自分のことも大切にする自己表現をしていこうとする態度の変容が見られる。
- いろいろな人の意見を知ることで、望ましい自己表現をしていないことに気づき、表現方法を改善しようとしている。
 - ・知らない人にも自分の思いを積極的に伝えていこうとする姿が見られるようになった。

<課題と感じていること>

- ロールプレイという体験的参加型の手法により、生徒たちは「これからは、自分も相手も大切にしたい自己表現をしていきたい」と考えるようになったが、知的理解のレベルにとどまる傾向にある。日常生活の実際の場面でどのように実践、行動させていくか、すべての教育活動における今後の課題である。

【 人権教育の指導方法等に関する調査研究会議によるコメント 】

大分県立大分商業高等学校

生徒の実態（自己肯定感のもてなさ）を踏まえ、コミュニケーション能力を高め、自他を大切にすることを養うことを目指している。実践を通して、生徒自身が「他を思いやる」「自分の気持ちを伝える」ことの大切さに気づき、また日々の学習環境の整備により教員と生徒との信頼関係が深まることを具体的に導き出している。

とくに、①ホームルーム活動による生徒の自己表現能力の育成、②授業における教員の自己評価による授業改善に力点を置き、検証的な研究をすすめている。①では、ロールプレイングによるアサーティブな表現方法の習得を図り、それが生徒個々の学習意欲と生活への自信の育成に資することを明らかにしている。②では、10項目の自己評価表を用いて、各教員が自己評価した結果を学年部で検討し、教員の授業力アップを図っている。各生徒の人権感覚の育みとともに、教員自らの積極的な授業変革への取組がみられる。